中世北インド民衆思想とカビール

橋本　泰元

【1】はじめに

筆者は，これまでカビール（Kabīr 1398-1488A.D.）という，中世北インドに出現した低ヴァルナ出身で在俗の宗教詩人に焦点を当て，その思想がヒンドゥー教，イスラーム教という言わば大宗教・大伝統の潮流の中で，どのように形成され広義のインド思想史上に確固たる地位を占めるに至ったかを明らかにするために，本文批評的観点を中心に哲学・文学の面から探求してきた。本稿は，共時的な面からカビールを比較考察し，その特徴を見ていこうとする最初のものである。カビール以外の宗教詩人の思想・文学については，インド内外の研究の平均的な成果に依拠して，その概要を記述するに留め，詳細な研究を今後の課題として残すために注記は煩瑣を恐れ省いた。また，カビールの主張からして後代に成立した「カビール派」とはどのような意義を有するのか検討を加えた。そして，最後に，カビールの主張の特徴を浮かび上がらせ理解を容易にしようと，その言説の中から，特徴的と思われるものの詩節を抽出し試訳を添えてある。

【2】中世北インドの宗教詩人

中世北インドの偉大な詩人たちの詩句は，ヒンディー語の源泉に立ち，その最盛期を代表するものでもあると言われている。彼らのヒンディー語の詩句は，400年前と同じように今日のインドの人々にとって生き生きとしており，身近のものである。学校児童，リキシャの運転手，ビジネスマンだれでもミーラーバーイー（Mīrābāī），ナーナク（Nānak）あるいはカビールの詩節の一篇くらいは暗唱できるし，スールダース（Sūrdās）やトゥルスィーダース（Tulsīdās）の作品は毎年何百万人もの人々を魅了する演劇に素材を提供しているのである。これらの詩は，内容的には宗教的なのであるが，主題は普遍的である。それらの詩は社会生活の労苦，移ろい易

い肉体，友情，裏切り，美しさ，生死そして愛情の苦悩と昂揚を語っている。

これらの代表的な詩人は，以下の６人である。ラヴィダース（Ravidās），カビール，ナーナク，スールダース，ミーラーバーイー，トゥルスィーダース。これらの詩人たちは，ただの詩人ではなく聖者とも見なされている。かれらの詩句が書き写され収集されるようになったのと同じ頃に，相当な量の聖者伝が著されるようになった。そして今日も，「聖者の生涯」を記述する学者の浩瀚な本から，村から村へと物語をして讃歌を歌いながら徘徊する吟遊詩人の朗誦まで様々な形態で増殖し続けている。宗教集団も，自分の保護者として受け入れることによって彼らを永遠化する機能を果たしており，大衆文化の多くの部門が最近，聖者伝を扱うようになった。漫画本は聖者が奇跡を称えながら歩む姿を描き，映画産業は超自然の妙技をスクリーンに描こうと挑み熱中している。

このように表現形態は様々にあるのだが，ここでは一群の聖者を扱うことにする。一群の聖者とは一般的にバクティ（bhakti）の聖者のことを指す。バクティは唯一の神への情熱的な愛情を意味し，他者との密接な関り合いを暗示している。バクティという言葉は「分かつ」を意味するサンスクリットの語根から派生し，熱狂的でしばしば会衆の形態をとる宗教における神と人間に対する関係の重要性を指示している。この一群の聖者を記述するのに時々用いられるもう一つの言葉は，サンスクリットの存在を意味する動詞から派生したサント（sant）である。この動詞とその派生形は，実在であるばかりでなく真実であることを意味している。そこでサントとは，誠実な或いは善良な人であると同時に人生に本質的なことを体現した人のことをいう。バクタ（bhakta）という言葉は「帰依者」或いは「神を愛する者」を意味するが，サントは saint に対するヒンディー語の類義語として敬称の意味で用いられている。

中世においては，この二つの用語が，神学の傾向を区別することなく六人の聖者を指すのに用いられていた。しかし近年になってバクティの二つの系統の概要を明確にするために，sant と bhakta を区別するようになった。Sant とは，「属性を賦与せず」或いは「形相を賦与せず」唯一の神を崇拝することを好む聖者のことである。彼らは，多くのヒンドゥー教徒がするように形象を通して神に至ろうとする人々に対して批判的な傾向を持

つ。これに反対の立場をとる,「属性を賦与して」神に至る人々は，神が地上の事柄を導き助けるために，本当に歴史上存在し，寺院の本尊としての形であるにしても，形象をとったと主張する。この人々はバクタかヴァイシュナヴァ（Vaiṣṇava）と呼ばれている。後者の呼称は，彼らが集団として，至高神ヴィシュヌ（Viṣṇu）の二つの主要な表現態すなわち化身としてのクリシュナ（Kṛṣṇa）とラーム（Rām）のうち，どちらか一方の崇拝者である傾向にあるので，適切である。

これら六人の聖者のうち，ラヴィダース，カビールそしてナーナクの三人は「無属性」の系統に属し，スールダース，ミーラーバーイーそしてトゥルスィーダースの三人は「有属性」の系統に分類されている。そして神への堅固な信仰が，両系統を特徴付けている。例えば「無属性」の系統の三人の聖者はみな，スィク（Sikh）教聖典となった詩集成『アーディ・グラント』（*Ādi Granth*）の中で代表的人物とされている。この中では「有属性」の系統にはまれにしか言及がない。さらに，ナーナクとラヴィダースは明らかにカビールの系統に属していて，この三名は，中世北インドで重要なヨーガ派であったナート（Nāth）派の間で展開した観念にある程度影響を受けていたのである。そして最も重要なことは，この三人が内面の宗教の不朽の弁護者であり,「有属性」の宗教のより一般的な表現態－形象と神話を通しての崇拝－が持つ皮相性と欺瞞性を公然と疑っていることである。

形象を崇拝する－「有属性」の系統－人々も，重要な類似点を共有している。スールダースとミーラーバーイーの二人は，基本的にはクリシュナの帰依者であり，二人が描くクリシュナの世界は相互に近しい関係にある。三人目のトゥルスィーダースは，ラームを親しく描いたが，伝統をみれば，彼とクリシュナの崇拝者スールダースとの間には類似性があることは確かである。この二人が別々の宗教と世代の出身者であるという事実があるにもかかわらず，二人が一度会ったという伝説がある。この仮定には論理的に十分な関連がある。なぜならクリシュナの帰依者スールダースもラームへの詩を書き，ラームの詩人トゥルスィーは一箇の詩集成をぜんぶクリシュナに捧げたのであった。

このように，聖者の二系統の分類があるのだが，聖者全員は，インドの他の地域で一千年期に亘って力を貯めていた民衆的なバクティ運動を共通して継承したのであった。

サンスクリットの良く好まれる一節で，バクティは南インドで生まれた（A.D.6 世紀頃）美しい女性として擬人化されていて，西インドの中部で力を得て成熟し（12 世紀以降）衰弱して，北インドに達して回復し完全に開花したとされている。この運動の進路は，同じ位何世紀にも亘ってはっきりと存続したのである。そのメンバーは，広範囲に広がる正式な組織の成員ではなかったが，宗教における個人の経験の重要性を熱心に説いた点で共通していた。それゆえ彼らは，ブラーフマンが司祭するヒンドゥー教の崇拝様式に特徴的な儀礼至上主義を問題視し，それに付随するヴァルナ制の偏見を批判したのである。個人の経験の価値を彼らが信頼していたもう一つの帰結は，自分の信仰の的確な表現方法として土着の地域語を使用したことである。サンスクリットは，精巧な古語であるが，人々の心にふれるにはほとんど役立たなかったようである。

以上のことが，六人の聖者が継承した共通の過去であり，彼らは，各自の時代において共通した詩的な環境にいたのである。彼らが強調する点はとても異なるのだが，彼らはみな「ヴィナヤ」(vinaya「哀願」というジャンルの詩作をした。これによって彼らの詩は，その立場が「有属性」系統であろうが「無属性」系統であろうが係わりなく，同一の詩集成に収められるのに相応しいものとなったのである。彼らが同類であったという意識も，彼らの周りで増大した聖者伝の伝統の中に見られる。すでに見たように，トゥルスィーとスールを結びつけようと時代錯誤的な邂逅が作り上げられ，同様の邂逅がカビール，ラヴィダースそしてナーナクを関係付けるために定型化された。こうした想定された邂逅が，バクティの二つの大きな系統を規定しているのであるが，他の想定された邂逅も，見方を変えれば，その統合を補強していると言えよう。ミーラーバーイーはふつうラヴィダースの弟子であったと解釈されているが，ラヴィダースは彼女とは反対の系統におり，またトゥルスィーダースが，ラヴィダースとカビールが属していたと信じられている師弟の系譜（ラーマーナンド Rāmānand まで遡る）のなかに位置付けられているのである。

これらの六人の詩人・聖者は，それ以前にも以降にもないほど，今日の北インドにおけるヒンドゥー教の宗教的語彙を豊富にした。崇拝形式，体制そして政治的文脈においてすら，現代ヒンドゥー教は彼らの詩節を用いているのである。五百年の間，これら聖者たちの詩はヤムナー川沿いの地

帯からビハールの水田地帯そしてラージャスターンの砂漠にまで広まり，北インド全域をバクティが語られる地域にするのに決定的な役割を担ったのである。彼らの影響が宗教的なものであることは確かであるが，それ以上である。これらの詩は，多くの人々が持つ最も真に迫る関心事－冷酷と孤独，身分と親密，期待と心酔，そしてそれらの儚さ－を表現しうる言葉を与えたのであった。これらの現実は，我々が宗教と係わる境界をいとも容易く超え，同様にインドという国境を超えるのである。

【3】カビール（Kabīr）の主張

bindu rākhi jau tariai bhāī /
　　tau khusarai kyūṁ na parama gati pāī //
kahai kabīra sunauṁ re bhāī /
　　rāṁma nāṁma bina kina sidhi pāī //
　　([PT] *pada* 174.3, 4; [PV] *pada* 132)

ビンドゥ（精液）を溜めておいて彼岸に行けるなら，
　　兄弟よ，去勢牛はなぜ最高の帰趨を得なかったのか。
カビールは言う，聴け兄弟よ，
　　ラームの名号なくて誰が成就を得たか。

北インドの宗教が及ぶ全域で，カビールの言葉ほど説得力があり熱のこもった自信に満ちた言葉はないと言ってよいだろう。カビールは身の回りの世間といつも争い既成宗教に批判の矢を常に向けていた。このことで彼は，トルコ系末裔のスルターンが支配していたバナーラスのマスジッドや法廷で法服に身を包み香水をつけてイスラーム法を解説していた法官（qāzī）には好まれるはずがなかった。また，この法官たちと共存していた議論好きで横柄なブラーフマンの学僧（paṇḍit）たちに好まれるはずもなかった。さらに，カビールが，今日と同様に当時も出家の教えを町中に説き，時には良い身なりをして時には乱れた格好をしていたヨーガ行者の大きな関心をかう機会もなかった。しかし，カビールが言ったことは，挑戦的な箴言の形で庶民－店主，漁師，主婦そして力車夫－に確かに受け入れ

られ，今日に至るまで人々の口に上っているのである。

ヒンドゥー教徒にとって大切なものに関するカビールの句が次のようにある。

beda purāṁna paṛhe kyā guna khara candana jasa bhārā /
rāṁma nāṁma kī gati nahiṁ jāṁnīṁ jāṁnīṁ
kaisai utarasi pārā //
([PT] *pada* 191.1 ; [PV] *pada* 39.1)

ヴェーダ，プラーナを読誦して何の徳がある，
驢馬が白檀樹を背負っている如し。
ラームの名号の帰趨を知らずして，どうして彼岸に渡れるか。

イスラーム教徒であるために割礼が必要なのであろうか：

sakati saneha pakari kari sūnati maiṁ na badaüṁgā bhāī /
jau re khudāi turuka mohiṁ karatā
tau āpahiṁ kaṭi kina jāī //
([PT] *pada* 178.1 ; [PV] *pada* 59)

力と愛情をもって割礼をしろと私は言わない，兄弟よ。
もし神が私をトゥルク（イスラーム教徒）にしたいなら，
なぜ自然に切れないのか。

また裸形の修行者の実修について：

nāṁge phireṁ joga jau hoi /
bana kā miraga mukuti gayā koī //
([PT] *pada* 174.1 ; [PV] *pada* 131)

裸で徘徊しヨーガ（合一）が得られるならば，
森の鹿は解脱したのか。

それからカビールは生を深く内省する:

mānukha janama dulambha hai, hoi na bārambāra /
pākā phala jo giri parā, bahuri na lāgai ḍāra //
([PT] *sākhī* 15.5; [PV] *sākhī* 12.34)

人間の生は得がたい，何度あるものでなし。
熟れた果実が落ちれば，再び幹に付くことなし。

そして死について:

hāṛa jarai jyauṁ lākarī, kesa jarai jyauṁ ghāsa /
saba jaga jaratā dekhi kari, bhayā kabīra udāsa //
([PT] *sākhī* 15.7; [PV] *sākhī* 12.16)

骨は木材のように燃え，髪は雑草のように燃える。
全世界が燃えているのを見て，カビールは憂鬱になった。

【4】カビールの伝記

ラヴィダースの場合と同じように，これほどの社会への糾弾と生への洞察を生み出したカビールの生涯について，我々は歴史的に正確なことはほとんど知らない。カビールという名前はイスラーム教徒の名前であり，『クラーン』のアッラーの異名で「偉大な」を意味する。しかし，最も真正とされる彼の詩句の中には，カビールが文字通りのイスラーム教徒であることを示唆する詩句がほとんどないのである。カビールはイスラーム教を受け入れるよりも批判をしており，明らかに，イスラーム神学の精妙な点をほとんど評価しなかった。彼はヒンドゥー教のやり方により親しんでいたようである。もっともヒンドゥー教も彼の批判を受けており，カビールはイスラーム教に表面的に改宗したばかりの社会集団の出身者であるという推測が近年なされている。[(1)] この推測は，伝説や彼に帰せられる詩句に描かれたカビールの社会的立場に相応しく思える。

カビールは明らかに織工ジャーティ（julāhā, korī）に所属していて，そのジャーティは階層序列の中で自己の低い位置を否認する正当な理由をもち，イスラーム教に改宗したのであった。詩句と伝記が，カビールの仲間である織工たちはバナーラス（Banāras ＜ Vārāṇasī）出身であったと一致して主張している以外には確かなことは何もないのである。

何世紀にも亘って，バナーラスの織工たちは街の通りや広場を自分の製品で飾ってきた。インド全土から人々は，バナーラス製の見事に織られ金銀で縁取られたサーリーを求めにやって来る。これらの衣料品は目の楽しみの一つでもある。早朝，織工たちは，ほとんどはイスラーム教徒であるが，鮮やかに染めた糸綛を乾かすために掛け台に一度に何百ヤードも広げて伸ばす。そして，もし織工たちの住む地区を通ることがあれば，耳の楽しみも稀ではない。中庭の壁の向こう側，広いベランダで男たちは織機に座り，ぴんと張られた縦糸に横糸を通す杼を熱中した様子でリズミカルにすばやく動かしている。しばしば彼らはそうしながら歌っている。こうした時が，曲がりくねった街の路地に溢れる騒々しい出来事に思いを巡らせる機会を与えてくれたのであろう。カビールは確かにたくさんの熟考をしたのであった。彼の伝記と彼自身のものとされる作品は，カビールが自分の考えたことにとても興奮し，じっと座っていられなくなり飛び跳ねて論争に加わったことを示している。

カビールが宗教に関する論争に巻き込まれやすい性格で，家計のことはあまり気にせずに頻繁に織機を離れていたとは容易に想像できる。このことは，『バクト・マール』（*Bhaktamāla*）[2]に対するプリヤーダース（Priyādās）の注釈[3]に述べられており，この注釈はラヴィダースのものと共にカビールの生涯に関する最古の記述の一つである。しかし，この記述の理由は，すでに引用した詩句から浮かび上がる辛辣で強硬な人柄をもとに想像できるところとは，かなり違っている。プリヤーダースは，カビールがなぜ仕事の上でお金をよく儲けられないのかを示す中で，自分が抱く聖者のあるべき姿の中核に横たわる優しい抽象的な型にカビールの姿を当てはめようとしているようである。プリヤーダースは，カビールが商売が下手だった理由の一部は，カビールが仕事をしている間に気づかぬうちに瞑想にしばしば入ったり，布地を売りに市場に行くと自分の寛容な心におそらく抗しきれずに貧しい乞食たちに全てを与えてしまうからであると述

べている。プリヤーダースが記しているところによると，カビールはそうなって家に戻ると，その感覚にとても恐ろしくなり，もう市場に行かなかった。またカビールは，家族がお腹を空かしているのに3日間市場に隠れていた。

最後には万事がうまく行く。プリヤーダースは好みの主題を明示しながら，カビールの他者に対する惜しみない寛大な心に，神が牛車一杯の食料を家族に贈って応えたと述べている。プリヤーダースは，この出来事を詳しく述べるなかで，一瞬立ち止まって次のように記している。この大きな恵みが戸口に届いたときに，カビールの母親は喜ばなかった。彼女はこの稼ぎもしない恩恵を受け取っていつしか罰を受けるのではないかと心配し，この食料を届けて立ち去ろうとする商人を怒鳴りつけた。

この物語はさらに展開して，聖者カビールの寛大な心と信愛のカリスマ性が貴族を含む大勢の信奉者をいかにして惹きつけたかを説明する。プリヤーダースの伝記に描かれた他の人物と同じように，カビールのこの人気が，自分たちの影響力が侵食され立場が危うくなると感じていた－彼らをラヴィダースに対していきり立たせたのと同じ感情－ブラーフマンたちの怒りと嫉妬を引き起こす。この場合，ブラーフマンたちはカビールの行動に不機嫌な母親の忠誠を勝ち取ることができ，母親は彼らに加わって，皆に大きな苦痛を味わわせたカビールを責め立てる。カビールを裁判に掛けようとして，ブラーフマンたちは彼を皇帝スィカンダル・ローディー（Sikandar Lodī）の前に引き出す。皇帝は，この時デリーからバナーラスを訪問に来ていたといわれている。スィカンダルの宮廷の法官（qāzī）は皇帝の前に跪くように命令するが，カビールは拒否して，唯一の神に額ずくことしか知らないと言う。この言葉は，皇帝が，カビールを鎖で縛ってガンガー川の真中に投げ捨てよという裁決を出すのに充分である。この命令は実行されるが，皇帝の部下が川岸に戻ると，カビールが無傷で岸に立っているのを見つける。（カビールの生涯を描く現代の漫画の表紙には，彼が川の中を歩いて渡ってそこに着こうとしている姿が描かれている。）兵士は，魔法が使われているのではないかと疑って，カビールの体を近くにあった火葬の薪の上の置く。そして薪に点火するが，遺体は魅惑的な黄金色の光輝を放つばかりである。聖者カビールは傷つくことはないのである。この出来事はすぐに宮廷に知らされ，カビールは間もなく帰依者のな

かにインドで最も強力な支配者を加えることができる。

しかしながら，なにもブラーフマンたちの怒りを宥めることは出来ない。彼らは，王族の耳目を集めるのに失敗したので，カビールの仲間たちを組織して彼に反目させようとする。ブラーフマンたちは，群集がやって来て何も食べ物がないのを見れば大騒ぎになると期待して，近隣の不可触民をカビールの家の御馳走振舞に招く。前の場合と同じようにカビールは，差し迫る群衆の気配を察して身を隠してしまう。

しかし，彼の庇護者である神自身が，カビールの姿になってやって来て約束を果たし客たちにの要求を満たす。こうしてブラーフマンたちの悪巧みはまたもや挫かれる。さらに彼らは，チッタウル（Cittaur）の王妃ジャーリー（Jhālī）の宴会でも敗北する。プリヤーダースは明らかにこの主題が好きである。おそらくそれは，ブラーフマンの伝説的な食欲に対する彼の注釈なのかもしれない。ブラーフマンの伝統的な生計は，他のジャーティ成員が供する食物にとても依存しているからである。

カビールの生涯の最後は，その生涯がほぼ至る所で受けた注目に較べると，驚くほど節約して語られる。プリヤーダースは，カビールが晩年にバナーラスをあとにし，ゴーラクプル（Gorakhpur）市の数キロメートル北にあるマグハル（Maghar）という小さい町に住んだということをほとんど語らない。カビールは死期を近くに感じると，花を求めさせ寝床に撒き広げ，そして神の無限の愛のなかに永遠に融合した。

この静寂な旅立ちは，より大きな伝承が語る所と全く異なる。より一般的に伝えられていることは，カビールの死は大勢の人が目撃し，その中にはヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が同じくらいいたということである。偉大な聖者カビールが他界すると，両教徒は大変興奮してお互いにくってかかり遺体に対する権利を主張した。しかし，彼らの争いは無駄であった。互いに亡き骸を奪って争ったあと，彼らが見たものは，亡き骸ではなく一束の花－別の伝承では二束の花－であった。天からの声－それはカビール自身だったのか－はそこにいたイスラーム教徒に慣行に従って，その花束を埋葬するように助言し，ヒンドゥー教徒には望むようにもう一つの花束を火葬するように助言した。[4] この物語の目的は，ヒンドゥー教であろうとイスラーム教であろうと宗教的慣行はカビールの説く真実在に届かないことを示すことか，或いは，最近出版された本の副題「ヒンドゥー教とイス

ラーム教の統合の使者」[5]のようにカビールを提示することである。カビールの死に際してどちらの群衆が取った方法も，神が唯一であるというカビールの教えを人々が受け入れられなかった最初の例示と言える。

カビールを愛する伝記作者たちは，カビールを彼自身の説く所に従って受け入れることにおいて，好戦的な二つの群集とまったく変わりがないことを露呈している。例えば，プリヤーダースは，カビールが群集の前でどれほど恥ずかしがるか，彼の小心さをたいへん強調する。しかし，カビール自身の言説をみれば，正反対であることが判る。カビールは大変挑戦的で敵に横槍を出させたくなかったのである。

paṇḍia kavana kumati tuma lāge /
būṛahuge parivāra sakala siuṁ
rāṁma na japahu abhāge // ṭeka //
([PT] *pada* 191; [PV] *pada* gauṛī 39)

パンディット（ヒンドゥー教学僧）よ，
どんな悪い考えがおまえにとりついたのか。
不幸にも家族もろとも沈んでしまう，ラームを念じなければ。

kājī taiṃ kavana kateba bakāṁnīṁ /
paṛhata paṛhata kete dina bīte
gati ekau nahiṁ jāṁnīṁ // ṭeka //
([PT] *pada* 178; [PV] *pada* gauṛī 59)

カーズィー（イスラーム法官）よ，
それはどの本から解説しているのだ。
〔それを〕読みに読んで何日経った，
〔それでも真実在の〕帰趨をひとつも知らぬ。

プリヤーダースは，また，カビールがバクティの共同体において他者に対して親切であることに賦与した重要性を強調する。しかしながら，次の言葉が好意的に聞こえるだろうか。

bolanāṁ kā kahie re bhāī / bolata bolata tatta nasāī // ṭeka //
([PT] *pada* 61 ; [PV] *pada* gauṛī 67)

何を話したらよいか，兄弟よ，
　　話しているうちに真実が壊れる〔のに〕。

プリヤーダースの説明の中に信頼できることがあるとすれば，それはたぶん，カビールの異様な行為と，それが引き起こした母親の困惑と悲しみを強調している点である。ある伝説によると，カビールは信心深い連中を遠ざけるために娼婦を引き連れ，とても激昂するほどではないにしても母親を怒らせたことは容易に想像がつく。

マグハルでの花束の出来事も，カビール自身がマグハルについて言わなければならなかったことと関連する伝説と比較してみれば，善意の嘘のようである。真正である可能性の充分高い詩節の中で，カビールは，自分をマグハルに引き寄せたのはヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の間に和平をもたらす衝動ではなかったこと明らかに述べている。カビールはそこで厳しくヒンドゥー教を非難するというよりも反ヒンドゥー教の立場をとったようである。なぜなら彼は，マグハルをバナーラスと同等のレベルにすることを明確に主張したのである。いかなるヒンドゥー教徒にとっても，それは過酷な要求である。ある強い伝承に拠れば，カビールは聖都バナーラスで死を迎えないように故意にそこを去ったのであり，彼はバナーラスが永遠の恩恵を与えるという一般的な考え方を認めていたようである。

aba kahu rāṁma kavana gati morī /
　　tajile banārasa mati bhaī thorī // ṭeka //
auṁ jala choṛi bāhari bhayan mīṁnāṁ /
　　puruba janama hauṁ tapa kā hīnāṁ //
sagala janama siva purī gaṁvāyā /
　　maratī bāra magahara uṭhi āyā //
bahuta barisa tapu kīyā kāsī /
　　maranu bhayā magahara kī bāsī bāsī //
kāsī magahara sama bicārī /

ochī bhagati kaisai utarsi pārī //

([PT] *pada* 46 ; [BI] *sabada* 108)

さあ教えたまえ，ラームよ，私の解脱はどのようなものか，
　　バナーラスを去って，〔私の〕望みは少なくなった。
水の外へ出た魚のように〔私は〕なってしまった，
　　前世において私は苦行を行わなかったからか。
全生涯をシヴァの街で無駄に費やしてしまった，
　　死期が近づきマグハルに移ってきた。
何年もカーシーで苦行をした，死ぬ時はマグハルの住人であった。
カーシーとマグハルは同じと考えた，
　　些細なバクティでどうして彼岸に渡れるか。

カビールが晩年をマグハルの織工たちの間で過ごそうとしたことを伝える多くの伝承を，疑う理由はほとんどない。そして，もしカビールが実際そうしたとすれば，それは，ヒンドゥー教徒に対して懐柔を装うものでは決してなかった。

カビールがヒンドゥー・イスラーム両教徒和解の偉大な代弁者であったという協調的な学説は，世俗国家インドにおいて信仰・信条に関する確かに便利な条項であり，また，彼の亡くなった跡に建てられた双生の建物，ヒンドゥー教寺院とイスラーム教墓廟に雄弁な表現を見出すのである。しかしながら，この学説は彼の詩節の中にはほとんど根拠がない。カビールは，言説のどこでもこの二大宗教に対して容認の態度を明らかにしてはいないのである。これらの宗教が根本的には同じであると人が信じるに至るカビールの言明は，それらが同じ調子で誹謗されている箇所である。

jau re khudāi masīti basatu hai aura muluka kisa kerā /
tīrathi mūrati rāṁma nivāsī duhu mahiṁ kinahūṁ na herā //

([PT] *pada* 177.4 ; [PV] *pada* āsavarī 52.4)

神がマスジッド（イスラーム礼拝堂）にしかおらずば，
　　他の土地は誰のもの。

聖地，神像にラームがおわすというが，
　　どちらにも誰も見たことはない。

【5】「無属性」(nirguṇa) の宗教の典型

ヒンドゥー教・イスラーム教に対するカビールの決まった非難は，彼の大変強い確信を映し出している。すなわち，唯一なる神は名称をつけることが出来ず，記述することが出来ず，想像を超えあらゆる束縛を離れている。カビールは，生の真実が，我々の怠惰な偽善を免れる多くの方法について敏感である。生の真実は，我々の期待に対する挑戦として立ち現れる極度の孤独と死という状況の中で，静寂あるいは驚愕の中で，懸命の努力と代価を伴ってしばしば遭遇出来るものである。これらが，カビールが何度も繰り返し説く主題であり，カビールが自分を表現する方法を形作っている。彼は，自分の周りで無駄口をたたくカーズィーやパンディットのような新たなる予言者になることに全く関心がない。そして彼が長々と喋るときは，書き留めて置けるような宗教的真理のようなものを学びたいと期待してやって来る聴衆を困惑させるだけかも知れない。こうしたカビールの人を困惑させるような発話が，我々の理解を無視するので「逆転した言葉」(ulaṭbāṁsī)[6] と呼ばれている。

bīja binu aṅkura peṛu binu tarivara,
　　binu phūle phala pahariyā /
bāṁjha ke kokha pūta autariyā,
　　binu paga taravara caṛhiyā //

([BI] *sabada* 16)

種無しの蕾，幹なしの枝，花なしの実がなった。
石女の胎に息子が生まれ，脚なく木に登った。

カビールの他の定型句と同じように，これらの「逆説詩」はたいへん短く辛辣で粗野であるので，「宗教的」な講話にはほとんど値しない。カビールの目から見れば，それこそがすばらしいのである。

カビールが理解していた宗教ーもしもそれが宗教ならばーは，カーズィーとパンディットに食糧をもたらす説戒と安心(あんじん)を説く宗教と全く異なるものである。彼の信条は，バクティの宗教のうちで「無属性」あるいは「無形相」(nirguṇa) を説く派として伝統的に知られている。その信条では，属性と形相の二つの側面がないのである。この信条を唱える人たちは，初めに，唯一の神は言葉で言い表したり概念化したり，また目で見られるような実在ではないと主張する。神は客体ではなく，我々の言語活動や視覚化できるような象徴物よりも我々の身近に存在し，短く欠陥の多い存在という限界内で我々が理解できる生命よりも身近に存在する。もし我々が神に遭遇するならば，すなわち神が我々に遭遇するならば，その瞬間は，それに対して単純で容易な感覚をしばしば持つ。その感覚は空虚なものであると同時に充足されたものであり，それをカビールは，彼の前にあった実質的な伝統に従って，「本然な」(sahaja 仏教タントラとヒンドゥー・タントラの述語「倶生」) と呼ぶ。ここにいろいろな調子で，その覚知が表現されている。

kabīra mana sītala bhayā, jaba pāyā brahma giāṁna /
jihiṁ baisandara jaga jarai, so merai udika samāṁna //
([PT] *sākhī* 17.1 ; [PV] *sākhī* 39.4 ; [BI] *sākhī* 349)

カビール〔は言う〕，心が清涼となった，
　　ブラフマン（最高実在）の知識を得たとき。
世界を焼き尽くす火（vaiśvānala）が，私には水のようだ。

kabīra jantra na bājai, ṭūṭi gae saba tāra /
jantra bicārā kyā karai, cale bajāvanahāra //
([PT] *sākhī* 16.1 ; [PV] *sākhī* 46.20 ; [BI] *sākhī* 297)

カビール〔は言う〕，楽器は鳴らず，弦がすべて切れてしまった。
楽器は可哀想にどうすればいい，奏者は去ってしまった。(7)

次に，「無属性」のバクティ（nirguṇa bhakti）が無形相であることの意

味に移る。すなわち礼拝行為に関してである。「無属性」のバクティは容易には体制を形成しないし，世界に存在する宗教的構成体を疑ってかかる。この点から見れば，イスラーム教は，「ニルグナ」的な神学をとても精巧に混入しているにもかかわらず，ヒンドゥー教と同じく非難されるべきものである。イスラーム教は，きちっと限定した崇拝様式と聖典を生み出し，律法と宗教の聖典に記された命令を逸脱した者を罰するに充分自信のある法律体系を作ってきた。ヒンドゥー教は同じく悪いか，またはもっと悪いかもしれない。

人間は，太古からの形象への衝動に従い，意識を形成するのに象徴を通す以外に少なくとも最初は何も出来ないという見方を認めて，ヒンドゥー教は神をたくさんの形に描き，数多くの出来事の中に神の行為を描いてきた。これが，「有属性」(saguṇa) の宗教であり，形相をとって行為し認識され愛される神に対する崇拝であって，その礼拝様式は同様に形相と属性に溢れている。ヒンドゥー教寺院に入っていけば多くの光景と音と匂いに取り囲まれて，慣れない訪問者は宗教のジャングルに迷い込んだように感じる。カビールは確かにそう考えた。彼は，司祭僧が女神カーリーに捧げる供犠を見るも恐ろしいものと思った。そして，彼は，神を動物や人間の化身として描きその形態を崇拝し，化身の物語がブラーフマンの解説者たちと完備した宗教書産業を生む，こうしたことを全く無意味であると考えた。

mārī marau kusaṅga kī, kerā kāṭhaiṁ beri /
vā hālai vā cīriai, sākata saṅga niberi //
([PT] *sākhī* 24.2; [PV] *sākhī* 25.4; [BI] *sākhī* 242)

〔人は〕悪しき交わりで死ぬ，
　　ベールの木（ベルノキ）の側にあるバナナの木のように。
ベールの木が揺れればバナナの木は裂かれる，
　　シャークタ派との交わりを止めよ。

sākata kai tūṁ haratā karatā hari bhagatana kai cerī /
dāsa kabīra rāṁma kai saranaiṁ jauṁ āī tyauṁ pherī //

([PT] *pada* 161.3; [PV] *pada* rāmakalī 34; [BI] *kaharā* 12.9, 10.)

お前（マーヤー「幻力」）はシャークタ派のところの略奪者，
　　ハリ（神）の帰依者の奴婢。
〔私〕奴僕のカビールはラームの庇護の下におり，
　　お前が来るや追い遣った。

rāṁma rāṁma rāṁma rami rahie /
　　sākata setī bhūli na kahie // ṭeka //
kā sunahāṁ kauṁ suṁmirata sunāeṁ /
　　kā sākata pahiṁ hari guna gāeṁ //
　　([PT] *pada* 168; [PV] *pada* āsāvalī 19)

ラーム，ラーム，ラームに専心せよ。
　　シャークタ派に間違っても〔ラームと〕言うな。（繰り返し）
犬に誰が法典を説くか，
　　シャークタ派のところでハリ（神）の徳を詠うか。

神話の中の化身思想を徹底して批判して，

tehi sāhaba ke lāgahu sāthā /
　　dui dukha meṭhi ke hohu sanāthā //
dasaratha kula autari nahiṁ āyā /
　　nahiṁ laṅkā ke rāu satāyā //
nahiṁ devakī ke garabhahiṁ āyā /
　　nahīṁ jasode goda khelāyā //
prithimī ramana dhamana nahiṁ kariyā /
　　paiṭhi pātāla nahīṁ bali chaliyā //
nahiṁ balirāja so māṁḍala rārī /
　　nahiṁ hiranākusa badhala pachārī //
brāha rūpa dhranī nahiṁ dhariyā /

chatrī nichatrī nahiṁ kariyā //
nahiṁ gobaradhana kara gahi dhariyā /
nahiṁ gvālana saṅga bana bana bana phiriyā //
gaṇḍaki sāligrāma nahiṁ kūlā /
maccha kaccha hoya nahiṁ jala ḍolā //
dvārāvatī sarīra na chāṛā / le jaganātha piṇḍa nahiṁ gāṛā //
kahahiṁ kabīra pukāri ke, vai panthe mati bhūla /
jehi rākhai anumāna kari, so thūla nahiṁ asthūla //

([BI] *ramaini 75*)

その主に付き随え，主を得た者は〔生死の〕二苦が消え失せる。
〔その主は〕ダシャラタ王の家に化身しなかったし，
ランカー島の王を成敗しなかった。
デーヴァキー姫の胎に生まれなかったし，
〔養母〕ヤショーダーは懐で遊ばせなかった。
大地〔の女神〕に愛着せず抑えることなく，
地底界に入ってバリ王を騙さなかった。
〔キシュキンダー国〕王バリと戦を起こさず，
〔悪王〕ヒラニャカシャプを殺戮しなかった。
野猪の姿になって大地を持ち上げず，
クシャトリヤ（武士）を排斥しなかった。
ゴーヴァルダナ山を手に執り持ち上げず，
牛飼い人と共に森を徘徊しなかった。
ガンダキー川の岸にあるシャーリグラーマ石（ヴィシュヌ神の象徴）
にならず，
魚，亀となり水中を泳がなかった。
ドヴァーラカーの地で身体を捨てず，
ジャガンナータの地に遺灰を埋めなかった。
カビールは声を高くしていう，このような道に迷い込むな。
お前が想像している〔その主〕は，粗大でもなく微細でもない。

ko na muā kaho paṇḍita janā,

so samujhāya kahau mohi sanā //
muye brahmā visnu mahesā, pārabatī suta muye ganesā /
muye canda muye sesā,
muye hanimanta jinha bāṁdhala setā //
muye krisna muye karatārā, eka na muā jo sirajanahārā /
kahaiṁ kabīra muā nahiṁ soī, jāko āvāgamana na hoī //
([PT] *pada* 103; [PV] *pada* gauṛī 45; [BI] *sabada* 45)

誰が死ななかったか，パンディットの方々よ，
言ってみよ，判ったら私に言ってみよ。
ブラフマー，ヴィシュヌ，マヘーシャは死に，
パールヴァティーの息子ガネーシャは死んだ。
月は死にシェーシャ蛇神は死に，橋を掛けたハヌマーンは死んだ。
クリシュナは死に造一切主は死んだが，
ひとり創造者は死ななかった。
カビールは言う，去来無き者は死なず。

これらの物語の主眼点が神の限りなく広い愛を描こうとする場合ですら，カビールは留保する。彼が経験した神の愛は，ある充足感であり，それは配役を割り当て主客の別離を必ず表現する語りの手法では決して表現できなかった。

aba mohiṁ nācibau na āvai /
merau mana mandariyā na bajāvai // ṭeka //
ūbhara thā so sūbhara bhariyā trisanāṁ gāgari phūṭī /
kāṁma colanāṁ bhayā purāṁnāṁ gayā bharama sabha chūṭī //
je bahu rūpa kie te kie aba rūpa na hoī /
thākī sauṁja saṅga ke bichure rāṁma nāṁma basi hoī //
je the sacala acala hvai thāke cūke bāda bibādā /
kahai kabīra maiṁ pūrā pāyā bhayā rāṁma parasādā //
([PT] *pada* 50; [PV] *pada* soraṭhi 20)

もはや私には踊るにも踊れず，
　　私の心が小鼓（mardal）を鳴らさず。（繰り返し）
潤れていたものがすっかり満たされ，渇きの壺が破れた。
貪欲の長衣（colā）が古びれ，迷妄はすべて消え失せた。
多くの形をなしたが，その形はもはやない。
装いは草臥れ伴は離れて，
　　ラームの名号が〔私の心に〕住すようになった。
動くものは疲れて不動になり，議論は的を外した。
　　カビールは言う，私は満たされた，ラームの恩恵を得た。

しかし，カビールは言葉を諦めたり，言葉に意味を与える共同体を捨てたりはしなかった。伝統的な伝記は，カビールにある種の宗教的共同体を与えている。かれの真正の詩句を注意深く読めば，別の共同体が浮かび上がるが。プリヤーダースが著したような伝統的な伝記は，カビールが如何にしてラーマーナンドの精神的指導を求め弟子になったかを告げる。その物語によれば，カビールは，自分のような低いジャーティ出身の弟子を誰も受け入れようとしない偉いブラーフマンを知っていた。そこで，彼は，そのブラーフマンに師事しようとある策略にでた。カビールは，ラーマーナンドがバナーラスにすむ善良なヒンドゥー教徒と同じように毎朝夜明けまえガンガー川に沐浴に行くことを知っていた。少年カビールは，ラーマーナンドの習慣を注意深く観察し，ある日川に通じる階段に身を横たえた。そこは，ちょうど聖者ラーマーナンドがいつも通う場所だった。

カビールが予想していたとおり，ラーマーナンドは暁の闇の中で彼を見ることが出来ず，その足が次の段ではなく生き物の上に掛かって心配と驚きで「ラーム」と叫び声をあげた。この言葉は，北インドで神を表わす偉大な名号の一つで，至高の神ヴィシュヌの主要な化身のひとりを指すと同時に，神一般をも指す。この「ラーム」は，マハートマー・ガーンディーが暗殺された時に叫んだ言葉である。これは，また，ラーマーナンド自身の名前の前半部分を表わしている。だから，ラーマーナンドが「ラーム」と叫んだ時，カビールは，その言葉を，師が弟子の頭に手を置いて伝授する入門のマントラ（真言）と解釈することにした。それ以来，カビールはラーマーナンドを導師と見做し弟子の仲間入りをした。[18]

ラヴィダース（カビールより少し年上で同じくバナーラスに住した皮革職人のサント）の場合と同じように，カビールとラーマーナンドの関連の歴史的な確実性を疑う充分な理由がある。カビールは，その詩の中で自称の導師について全く言及していないし，ラームの名号を彼が用いるのは，ラーマーナンドの弟子に我々が当然期待する場合の最も稀な時にのみである。カビールがラームについてよく語るのであるが，そのラームは「有属性」の意味に於いてではない。カビールは，自分が語るラームと，ヴィシュヌ神の化身であるラームの人々が嘉する行為とを結び付けない。カビールにとって，ラームという言葉は，神の名号の普通に用いられる言葉に過ぎない。そして彼自身が言及し，また自身が居心地良く感ずる共同体は，ラーマーナンドが代表していると思われるヴィシュヌ派の宗教とはかなり趣を異にしているのである。[9]

その共同体とはヨーガ行者の共同体であり，11～12 世紀頃に多分実在したゴーラクナート（Gorakhnāth）を含むナート（nāth「守護主」の意味）の系譜に連なる当時影響力のあった派に属するものである。ナート派が志向するのはヴィシュヌとその化身ではなく，ヨーガ行者の典型であるシヴァであり，ナート派ヨーガ行者にとってシヴァは系譜の上で初代の導師グルなのである。カビールの時代のナート派ヨーガ行者は，ハタ・ヨーガ（haṭha yoga）を含む精神的訓練を実修していた。ハタ・ヨーガは，真正の師（satguru）が熟達者に啓示する速成で本然（sahaja）なる覚知に導くとされている。ナート派ヨーガ行者は，大きく丸い耳飾と鹿の角で作った笛を持っていて，街角によく見掛けられていたようである。[10] ナート派に関して特異な点は，この派全体があるとき宗教的に，特にヨーガの成就を得るには出家主義が必要であるという前提を受け入れなくなったことである。彼らは結婚をし，多くの織工を含む在家信者と同じように家長となったのである。カビールの詩には，彼がナート派と密接な—時には友好的な，時には敵対的な—関係にあったことを示す詩句が執拗に出てくる。そして彼は，本物の宗教がどのようなものであるかという非常に内面的な理解に関してナート派に多くを負っていたのである。

カビールとナート派の繋がりの重要なものの一つは，カースト問題に関するものである。なぜならナート派は，ヒンドゥー教の階層社会を特に軽蔑しており，多くの不可触民と低ヴァルナ民はナート派に属していたので

あった。彼らが支持していた宗教的真実の「無属性」という考え方は，形象崇拝を説く「有属性」の宗教とブラーフマンたちの特異分野になった食事に関する規定，それらに対する強力なアンティテーゼであったことは確かである。「無属性」のバクティの中に，ヒンドゥー教社会から疎外されたと感じた人々にとって自然な避難所があったのである。

【6】カビールとラヴィダース

上記の理由で，カビールとラヴィダースを繋ぐ自然な絆に，どんな伝統が作用したかを検討するのは興味ある問題である。二人ともバナーラスの住人でヴァルナ制において低階層であり，「無属性」のバクティの代表者である。当然，この伝統が二人の絆を堅固にした。最古の物語は，カビールとラヴィダースをラーマーナンドの兄弟弟子と描いている。この中には，ある程度の神学的な混交がある。というのは，二人とも師ラーマーナンドによってヴァイシュナヴァ（Vaiṣṇava）－ヴィシュヌ神とその化身ラームやクリシュナの崇拝者－になったからである。また，その物語は，二人がどれほどのことを共有していたかを示している。シュリー・ゴーヴァルダンプル（Śrī Govardhanpur）に住すチャマール（伝統的には，皮革業に携わるジャーティ）たちがいうのに反して，バナーラスにはカビールとラヴィダースが恰も生まれながらにして兄弟であるという重要な伝承がある。カビールの推定上の生誕地はバナーラス市の西外延にあるラハルターラー（Lahartārā）で，ラヴィダースはそこから遠くない低ヴァルナ民の大きな村マルアーリー（Maṛuāṛīh）で生まれたといわれている。

しかしながら，17 世紀以降，この二人の近しい関係を疑い，二人の聖者は実際にはある程度敵対していたことを示す文書が出まわるようになった。この韻文で書かれた『カビールとラヴィダースの対話』（*Kabīr Ravidās Saṃvād/Goṣṭī*）は，明らかに，ラヴィダースがカビールに劣ることを示そうとした人の手によって著された。[00] ラヴィダースは，討論の間ずっとカビールに敬意を払っていて，初めのうちはただ「長老」（būṛhe）と呼びかけているが，後半では「主」（svāmī）と呼びかけている。討論が終わりに近づくと，ラヴィダースは完璧にカビールの考え方に変わってしまう。冒頭でこの二人の聖者を分ける問題は，決定的に重要な「無属性」対

「有属性」の議論である。そして,「無属性」の宗教の立場を終始一貫して信奉する立場を取るのがカビールである。ラヴィダースには,「有属性」のバクティを防衛するという割の悪い役割が割り当てられている。彼は，クリシュナやラームが与えてくれる即時的で現世的な救済を人々が必要としていると主張する。しかし，カビールは，即妙な回答をいつも持っている。例えば，クリシュナがそこから信徒を救い挙げる地獄は実際には妄想に過ぎない，或いは，ラームの神話は鹿の幻影によって欺かれる可能性を示していることを指摘して，彼はラヴィダースを打ち負かす。それからラヴィダースは，ヒンドゥー教の第三に主要な神である女神シャクティ（Śakti）すなわちドゥルガー（Durgā）の重要性を説こうとするが，カビールはドゥルガーが供犠に依存していることを冷笑する。最後にラヴィダースは,「無属性」と「有属性」の宗教は本質的に同一である—このことはたとえ師匠ラーマーナンドに教わったとしても—とする誤解に気づいて，カビールに何が真実かを尋ねる。カビールは，ゴーラクナートが自分の師匠であると説明し，真実の神は無形相（nirākara）でありその神ラームは内在する（ātmarāma）と教える。ラヴィダースはこの教えを有難くいただく。

ラヴィダースの信者たちがこの文書に時々憤慨したのも驚くに値しない。彼らは，二人の議論の結果が正反対に描かれていることを他者に示すことが出来るのである。すなわち，ラヴィダースがカビールを打ち負かせたと。こうしたものの中に，近年刊行された『バヴィシュヤ・プラーナ』（*Bhaviṣya Purāṇa*「未来の古譚」）と『ラヴィダース・ラーマーヤナ』（*Ravidās Rāmāyaṇa*「ラヴィダース叙事詩」）がある。後者の文献は，教義ばかりでなく実修も扱っており，チャマールが触れて汚れたからといってラヴィダースが差し出した水を最初カビールがどのようにして断ったか，そしてカビールが自分の誤りを改めざるを得なかったかを説いている。こうした小作品は，このような討論が神学的にいかに柔軟かを示している。元の『カビールとラヴィダースの対話』が,「無属性」と「有属性」の考え方が究極的には同一のものに至ると考えているラヴィダースを非難しているのに反して，この普遍的な考え方は,『ラヴィダース・ラーマーヤナ』における洗練された点として見なせる。そしてカビール派が近年出版した文書も同じ主張をする傾向にある。[03]

【7】カビール派（Kabīr Panth）

カビールの宗派とは？　人はどんなにぞっとする思いをしたことであろうか。しかし，カビールが，自分の名前が今日のバナーラスで生きているのを見て感じるだろう驚きに比べれば，その思いは大したものではなかったのではなかろうか。

バナーラス市の大きな中心街のひとつが，「カビール街区」（Kabīr Caurā）と呼ばれていて，カビールの名前だけではなく寺院の名前に因んで，そう呼ばれている。「カビール寺」（Kabīr maṭ）は，さほど遠くはない路地に隠れてある。この寺は，カビールが住んでいたといわれている部屋の周りに建てられている。その部屋の中には，かれの遺品が見られる。彼が履いていたという木製の下駄（kharāūṁ），飲料用の木製の壺（kamaṇḍalu），ゴーラクナートから授かった三叉戟（triśūl），そして師資相承を許可された時ラーマーナンドから授かった大きな数珠（jap-mālā）である。しかし，中庭に向きを変えて僧房を過ぎ，広い場所を占めている本堂をよく見ると，カビール自身の言葉，考え方からすればより目立つ物を目にすることが出来る。それは，カビール自身の大きな肖像画である。ここには，形象崇拝に反対する「無属性」の宗教の提唱者が，「敵」の内陣に祀られているのである。カビールは，ある意味で「有属性」のヒンドゥー教の万神殿の一人になったわけである。毎朝暮，カビールに帰せられている詩節の読誦が集会の僧侶たちによって速いテンポで行われ，信徒がいれば唱和する。この儀礼化された読誦は，カビールの肖像画に灯明を献供する儀式を伴う。これは，一般的なヒンドゥー教寺院の神像の前で行われる儀式と同じである。そして，カビール派の一支派であるダルマダース（Dharmadās）派は，カビールの像を祀っているのである。

このカビール寺の夕勤行では，詩節の読誦や献供はカビール自身に向けられていることが明瞭になる。そして，勤行の最後のほうに行われる儀式は，カビールにとって極めて衝撃的に映るに違いない。カビールは，ブラーフマンが専門化した宗教的知識に通達した振りをしていると飽くことなく弾劾していた。そして，サンスクリット語がこの独占を可能にしていた主要な媒体であった。カビールは，サンスクリット語が古びて大げさなも

のだと嘲笑している。たとえ真正でないとしても，彼の最もよく知られた詩節は，古びて小さい井戸からまずい水を飲むか，それとも盛んな流れの傍で喉の渇きを癒すのかと問い質し，サンスクリット語と民衆語のリズムを対照させている。[09] さらに，カビール堂の夕勤行の最後に，導師が他ならぬサンスクリット語で「至高のカビール」と称揚し，勤行に続く説教会もサンスクリット語で始まる。その日の説教師が，カビールの詩に対するサンスクリット注釈を読み上げるのである。この説教は聴衆のだれも理解できないと思う人がいるかもしれないが，そうではない。なぜなら，この寺は，新参者にサンスクリットを教えるために創られた学校を誇っているからである。他のカビール派の寺と同じくここでも，在住者と生徒たちは基本的に下層民であるが，しかし彼らは，禁欲主義の点でブラーフマンの宗教の特徴を慎重に受け入れているのである。院主は，カビールが被っていたとされている同じ円錐形の帽子を被り，上位ヴァルナの宗派の長に捧げられるような荘厳に値すると見なされている。[10]

いったい何が起きたのであろうか。マックス・ウェーバーは，宗教史の中で同様の変容を「カリスマの慣例化」と呼んでいる。そなわち，それは，人を引き付ける個人の魅力が体制の権威に変質する過程のことである。しかしながら，もし，カビール派（Kabīr Panth「カビールを崇拝する道」の意味）の歴史が，「慣例化」の歴史であるならば，カビール派は特にヒンドゥー教の形態をとることになる。なぜならば，カビールの教えが成文化され精神的系譜が権威付けされたばかりでなく，その共同体の少なくともある支派でカビールは超越的存在すなわち神自身として崇拝されているからである。18世紀或いは19世紀に著された『アヌラーグ・サーガル』（*Anurāg Sāgar* 「愛着の海」）のような聖典では，カビールは，ニランジャン（Nirañjana「無染」の意味）或いはカール（Kāla「時間」，「死」の意味）という原初の創造者の命令下にある常に恐怖させる邪悪な力に対抗して善の種を守護するために，時間の始まりにおいて本初の存在によって生み出されたとされている。両者の抗争は激しく，カールが人間を錯乱させ欺くためにヒンドゥー教の万神殿を流出させた後で特に激しくなる。しかし，カビールは，常に，劫期の経過に従いいろいろな化身を通して活動しながら自分自身を充分に保つことが出来る。最後に，彼は，世界に自分の真の姿－言葉が爾来帰依者の心に永く留められている15世紀のカビール－を見

せる。そして，善と悪との闘いは決定的に善の方に傾く。[19]

最も真正と思われる詩節から知られる辛辣で懐疑的なカビールは，このような世界観と救済論の神秘的な物語－それらが例え彼自身に面白いものであったとしても－に対して冷酷な発言を当然持っていたに違いない。さらに，彼がバナーラスの寺で勤行を創始したとは，想像しにくい。しかし，カビール派は，「開祖」に関して沈黙していなかった。バナーラス市の商人や牛乳屋は誰でも，また北インド全体が引用すべきカビールの一詩節を持っている。それらは500年に亘って歌い継がれてきたのであるが，その多くは，彼が世界に初めて浴びせ掛けた時に持っていたであろう辛辣で迫真の言葉を保ち続けている。

【8】カビールの詠歌（*pada*）－訳詩例

kā nāṁgeṁ kā bāṁdheṁ cāṁma /
　　jau nahiṁ cīnhash ātamarāṁma // ṭeka //
nāṁge phireṁ joga jau hoī /
　　bana kā miraga mukuti gayā koī //
mūṁṛa muṛâeṁ jau sidhi hoī /
　　saragahiṁ bheṁṛa na pahuṁcī koī //
bindu rākhi jau tariai bhāī /
　　tau khusarai kyūṁ na parama gati pāī //
kahai kabīra sunauṁ re bhāī / rāṁma bina kina sidhi pāī //
　　([PT] *pada* 174 ; [PV] *pada* gauṛī 131)

裸でなんだ，皮を身に着けてなんだ，
　　お前が心のラームを覚知していないならば。（繰り返し）
もし裸で徘徊してヨーガが得られるならば，
　　森の鹿が解脱したのか。
頭を剃って成就が得られるならば，
　　天国に羊は達しなかったのか。
ビンドゥ（精液）を留めておいて彼岸に行けるのなら，
　　兄弟よ，去勢牛はなぜ最高の帰趨を得なかったのか。

カビールはいう，聞け兄弟よ，ラームなくして誰が成就を得たのか。

paṇḍita kavana kumati tuma lāge /
　　būṛahuge parivāra sakala siuṁ
　　rāṁma na japahu abhāge // ṭeka //
beda purāṁna paṛhe kā kyā gunu khara candana jasa bhārā /
　　rāṁma nāṁma kī gati nahiṁ jāṁnīṁ kaisai utarasi pārā //
jīa badhahu su dharamu kari
　　thāpahu adharama kahahu kata bhāī /
　　āpasa kauṁ munivara kari thāpahu kākau kahauṁ kaśāī //
mana ke andhe āpi na būjhahu kāhi bujhāvahu bhāī /
　　māyā kārani bidyā becahu janamu abirathā jāī //
nārada bacanu biāsa kahata hai suka kauṁ pūchahu jāī /
kahai kabīra rāmaiṁ rami chūṭahu nāṁhiṁ ta būṛe bhāī //
　　([PT] *pada* 191 ; [PV] *pada* gauṛī 38)

パンディット（ヒンドゥー教学僧）よ，
　　どんな悪い考えがお前に取りついたのか。
不幸にも家族もろとも沈んでしまう，
　　ラームを念じなければ。（繰り返し
ヴェーダ，プラーナを読誦して何の徳がある，
　　驢馬が白檀樹を背負っている如し。
ラームの名号の帰趨を知らずして，どうして彼岸に渡れるか。
命を奪って正法を行っていると言うならば，
　　悪法は何か言ってみよ，兄弟よ。
互いに優れた牟尼と呼び合っているなら，誰を屠殺人というのか。
心の目が見えず自分を理解できずに，誰を解らせるのか，兄弟よ。
　　俗世の財のために智慧を売り，〔お前の〕生は徒に過ぎ行く。
〔お前は言う〕ナーラダ仙の言葉，
　　ヴィヤーサ仙はかく語る，シュカ仙に尋ねようと。
カビールは言う，ラームに専心しておれ，
　　さもなくば沈んでしまう，兄弟よ。

(96)

kājī taiṁ kavana kateba bakhāṁnīṁ /
　　paṛhata paṛhata kete dina bīte
　　gati ekau nahiṁ jāṁnīṁ // ṭeka //
sakati sancha pakari kari sūnati maiṁ na badaūṁgā bhāī /
jan re khudāi turuka mohiṁ karatā tau āpahiṁ kaṭi kina jāī //
sūnati karāi turuka jau honāṁ tau aurati kauṁ kā kahie /
　　aradha sarīrī nārī na chūṭai tātaiṁ hindū rahie //
hindū turuka kahāṁ taiṁ āe kina eha rāha calāī /
　　dila mahiṁ khoji dekhi khojāde bhisti kahāṁ taiṁ āī //
chāṁṛi kate rāṁma bhaju baüre juluma karata hai bhārī /
kabīrai pakarī ṭeka rāṁma kī turuka rahe paci hārī //
　　([PT] *pada* 178; [PV] *pada* gauṛī 59)

カーズィー（イスラーム法官）よ，
　　それはどの本から解説しているのだ。
〔それを〕読みに読んで何日経った，
　　〔それでも神の〕帰趨をひとつも知らぬ。（繰り返し）
力と愛情をもって割礼をしろと私は言わない，兄弟よ。
もし神が私をトゥルク（イスラーム教徒）にしたいなら，
　　なぜ自然に切れないのか。
割礼をしてトゥルクになるならば，女に何と言えばいい。
　　半身の女がいなくならないのならば，
　　ヒンドゥー教徒でなければならぬ。
ヒンドゥーとトゥルクはどこから生じたのか，
　　誰がこの道を始めたのか。
心の中に探して見て探しあてよ，天国がどこから生じたのか。
その本〔クルアーン〕を捨ててラームを唱えよ，
　　愚か者よ，重い罪を犯している。
カビールはラームの支えを得た，トゥルクは空しく生きる。

tananāṁ tajyau kabīra /
　　rāṁma nāṁma likhi liyau sarīra // ṭeka //

musi musi rovai kabīra kī māī /
e bārika kaise jīvahiṁ khudāī //
jaba lagi tāgā bāhauṁ behī / taba lagi bisare rāṁma sanehī //
kahata kabīra sunuhu merī māī / pūranahārā tribhuvanarāī //
([PT] *pada* 12; [PV] *pada* gauṛī 21)

糸を張り布を織るのを捨てた，カビールは。
ラームの名号を書いた，体に。(繰り返し)
密かに隠れて泣く，カビールの母は。
この子は，どうして生きて行けようか，神よ。
〔カビールは言う〕機の杼に糸を通していると，
ラームを愛していることを忘れてしまう。
聞いてください，母よ。
満たしてくれる者〔ラーム〕は，三界の王です。

jauṁ pai karatā barana bicārai /
tauṁ janataiṁ tīni ḍāṁṛi kina sārai // ṭeka //
je tūṁ bābhana babhanīṁ jāyā /
tau āṁna bāṭa hoi kāhe na āyā //
je tūṁ turuka turukinīṁ jāyā /
tau bhītari khatanāṁ kyūṁ na karāyā //
kahai kabīra maddima nahiṁ koī /
so maddhima jā mukhi rāṁma na hoī //
([PT] *pada* 182; [PV] *pada* gauṛī 41; [BI] *ramainī* 62)

もし創造者がヴァルナを考えるならば，
人〔は〕生まれながらにして〔シヴァ神の象徴である額の〕
三本線を何故付けて来ないのか。(繰り返し)
もしお前がブラーフマンで
ブラーフマンの女から生まれたのならば，
他の道を通ってなぜ生まれてこなかったのだ。
もしお前がトゥルク（イスラーム教徒）で

トゥルクの女から生まれたのならば，
〔胎の〕中で割礼を何故してもらわなかったのだ。
カビールは言う，生まれ卑しい者は誰もいない，
口にラームがいない者が生まれ卑しい。

jhūṭhe tana kau kyā garabāvai /
marai tau pala bhari rahana na pāvai // ṭeka //
khīra khāṁḍa ghṛta piṇḍa saṁvārā /
prāṁna gaeṁ lai bāhari jārā //
jihiṁ siri raci raci bāndhata pāgā /
so siru cañcu saṁvārahiṁ kāgā //
hāṛa jarai jaisai lakaṛī jhūrī /
kesa jarai jaisai trina kai kūrī //
kahai kabīra nara ajahuṁ na jāgai /
jama kā ḍaṇḍa mūṇḍa mahiṁ lāgai // 4 //
([PT] *pada* 62; [PV] *pada* gauṛī 93; [BI] *sabada* 99)

使い古した体を何故自慢する，
死ねば一瞬たりとも居られない。（繰り返し）
乳粥，黒糖，ギー（精製バター）で肉体を飾ったが，
魂が出てしまえば外に出されて燃やされる。
頭を飾ってターバンを巻いたが，その頭を烏が啄ばんで飾り立てる。
骨は乾いた木材のように燃え，髪は藁の束のように燃える。
カビールは言う，人間はまだ目覚めず，
ヤマ（閻魔）の刑杖が頭の真中に落ちようとしているのに。

bolanāṁ kā kahie re bhāī / bolata tatta nasāī // ṭeka //
bolata bolata baṛhai bikārā / binu boleṁ kyā karahi bicārā //
santa milahiṁ kachu suniai kahiai /
milahiṁ asanta masṭī kari rahiai //
gyāṁnīṁ sauṁ boleṁ upakārī /
mūrikha sauṁ boleṁ jhakhamārī //

kahai kabīra ādhā ghaṭa bolai /
bharā hoi tau kabahuṁ na bolai //
(PT] *pada* 61 ; [PV] *pada* gauṛī 67 ; [BI] *ramainī* 70)

何を話したらよいか，兄弟よ，
話しているうちに真実が壊れる〔のに〕。(繰り返し)
話しているうちに誤りが増えるが，
話さずにどうして考えることが出来よう。
〔だから〕善き人（サント）に会ったら少し聞き話せ，
悪しき人に会ったら黙っていよ。
知者と話せば利益となり，愚者と話せば無駄となる。
カビールは言う，半分満ちた壺は音をなし，
一杯に満ちた壺は決して音を出さず。

korī kau kāhū maramu na jāṁnāṁ /
saba jagu āṁni tanayau tāṁnāṁ // ṭeka //
dharani akāsa kī karagaha banāī /
canda suruja dui narī carāī //
sahaja tāra lai pūrina pūrī /
ajahuṁ binaiṁ kaṭhina hai dūrī //
kahata kabīra kāragaha torī /
sūtai sūta milāe korī // 3 //
([PT] *pada* 150 ; [BI] *ramainī* 28)

コーリー（織工）の秘技を誰も知らず，
〔織工が〕全世界に縦糸を張り巡らせた。(繰り返し)
大地と虚空の〔穴に〕織機を立てて，
月と太陽の二本の杼の糸巻を走らせた。
本然の糸を糸巻に満たし，今日も織っているが先は難しく遠い。
カビールは言う，織工は織機を壊し，糸に糸を絡ませる。

yahu ṭhaga ṭhagata sakala jaga ḍolai /

gavana karata moseṁ mukhahuṁ na bolai // ṭeka //
bālapanāṁ ke mīta hamārai /
hamahiṁ chāṁṛi kata cale ho ninārai //
tūṁ merau purikhā hauṁ terī nārī /
tohari cāla pāhanahuṁ taiṁ bhārī //
māṭī kai deha pavana kai sarīrā /
tehi ṭhaga sauṁ jana ḍarai kabīrā //
([PT] *pada* 139; [BI] *sabada* 37)

この詐欺師が全世界を騙して廻る，
立ち去るときに私に何も話さず。(繰り返し)
私の幼友達よ，私を残してどこへ行ったのだ，一人にして。
お前は私の夫，私はお前の妻，お前の足跡は石より重い。
土の肉体，風の身体，お前の詐欺に人は恐れる，
とカビールは言う。

jāi pūchau gobinda paṛhiyā paṇḍita
terā kauṁna gurū kauṁna celā /
apanaiṁ rūpa kauṁ jāṁnaiṁ āpai rahai akelā // ṭeka //
bāṁjha kā pūta bāpa binu jāyā
bināṁ pāṁūṁ taravara carhiyā /
asa binu pākhara gaja binu guṛiyā
binu ṣaṇḍai saṅgrāmahiṁ juṛiyā //
bīja binu aṅkura peṛa binu travara
binu sākhā taravara phaliyā /
rūpa binu nāri puhupa binu parimala
binu nīraiṁ saravara bhariyā //
deva bina dehurā patra binu pūjā
binu paṅkhā bhaṁvarā bilabiyā /
sūrā hoi su parama pada pāvai
kīṭa pataṅga hoi saba jariyā //
dīpaka binu joti joti binu dīpaka

hada bina anāhada sabada bāgā /
cetanāṁ hoi su ceta lījau kabīra hari kai aṅgi lāgā //
([PT] *pada* 119; [PV] *pada* rāmakalī 6)

行って神に尋ねよ，学問を修めたパンディット（学僧）よ，
　　汝の師は誰か弟子は誰かと。
〔神は〕自分で〔自分の〕姿を知り，
　　自分ひとりで存在する。（繰り返し）
石女の息子が父親なしで生まれ，脚がなくても高い樹に登る。
武器の付いていない甲冑，象のいない輿が剣を持たずに戦に挑む。
種のない蕾，幹のない樹が枝なくても実を結ぶ。
美しい姿のない女，花のない芳香，水がなくても池が満ちる。
神のいない神殿，葉を使わない礼拝供養，
　　羽根がなくても蜂が飛んでいる。
勇者ならばその至高の境地を獲得する，
　　虫や蛾ならば皆燃えてしまう。
灯火のない明かり，明かりのない灯火，
　　奏でられざる音が際限なく響き渡る。
これを認識できる者は理解せよ，カビールは神の部分に没入した。

【9】カビールの箴言詩（*sākhī*）－訳詩例

satagura bapurā kyā karai, jau sikhahī māṁhaiṁ cūka /
bhāvai tyauṁ paramodhie, jauṁ bāṁsi bajāie phūṁka //
([PT] *sakhī* 1.5; [PV] *sākhī* 1.21; [BI] *sākhī* 321)

正師は哀れにもどうしたらよいのか，弟子に誤りがあるときに。
覚醒させようとすれば，
　　横笛を鳴らそうと息を吹き掛けるようなもの。

kabīra candana kai biṛai, bedhe ḍhāka palāsa /
āpu sarīkhe kari lie, je hote una pāsa //

([PT] *sākhī* 4.1 ; [PV] *sākhī* 28.7 ; [BI] *sākhī* 49)

カビール〔は言う〕，白檀の樹は，
〔ありふれた〕ダーク・パラーシュ樹をも覆い囲む。
傍にあるものは何でも自分のようにしてしまう。

mānukha janama dulambha hai, hoi na bārambāra /
pākā phala jo giri parā, bahuri na lāgai ḍāra //
([PT] *sākhī* 15.5 ; [PV] *sākhī* 12.34 ; [BI] *sākhī* 115)

人の生は得がたい，何度もあることなし。
熟した実が落ちれば，再び枝に付くことなし。

kabīra harinīṁ dūbarī, isa hariyārai tāli /
lākha aherī eka jiu, ketika ṭārai bhāli //
([PT] *sākhī* 16.3 ; [BI] *sākhī* 18)

カビール〔は言う〕，牝鹿は痩せている，
この緑茂る湖〔があるのに〕。
10万の猟師と1頭の生き物，
〔それは〕どうして槍を避けられるか。

dhauṁ kī dādhī lākarī, ṭhāṛhī karai pukāra /
mati basi parauṁ luhāra kai, jārai dūjī bāra //
([PT] *sākhī* 16.2 ; [PV] *sākhī* 46.10 ; [BI] *sākhī* 71)

森火事に焼かれた樹が，立って叫んでいる。
鍛冶屋の手に落ちたくない，また焼かれたくない。

hāṛa jarai jauṁ lākarī, kesa jarai jauṁ ghāsa /
saba jaga jaratā dekhi kari, bhayā kabīra udāsa //
([PT] *sākhī* 15.7 ; [PV] *sākhī* 12.16 ; [BI] *sākhī* 174)

骨は燃える木材のように，髪は燃える雑草のように。
全世界が燃えているのを見て，カビールは哀しくなった。

kabīra mana sītala bhayā, jaba pāyā brahma giāṁna /
jihiṁ baisandara jaga jarai, so merai udika samāṁna //
([PT] *sākhī* 17.1 ; [PV] *sākhī* 39.4 ; [BI] *sākhī* 349)

カビール〔は言う〕，〔私の〕心は鎮まった，
　　ブラフマンの知識を得た時に。
世界を燃やす劫火も，私には水のようだ。

biraha bhuvaṅgama ta basai, mantra na māṁnaiṁ koi /
rāṁma biyogī nāṁ jiai, jiai ta baūrā hoi //
([PT] *sākhī* 2.1 ; [PV] *sākhī* 3.18 ; [BI] *sākhī* 97)

別離の蛇が体に巣くえば，どんなマントラも効き目なし。
ラームとの別離にある者は生きず，生きても気が狂う。

hari hīrā jana jauharī, lai lai māṁṛī hāṭi /
jaba re milaigā pārikhū, taba hīrā kī sāṁṭī //
([PT] *sākhī* 18.1 ; [PV] *sākhī* 49.3 ; [BI] *sākhī* 169)

神はダイヤモンドで信徒は宝石商，
　　〔信徒はそれを〕もって市場に並べる。
眼識のたかい顧客がいれば，ダイヤモンドは売れる。

mārī marauṁ kusaṅga kī, kerā kāṭhaiṁ beri /
vā hālai vā cīriai, sākata saṅga niberi //
([PT] *sākhī* 24.2 ; [PV] *sākhī* 25.4 ; [BI] *sākhī* 242)

私は悪しき交わりのせいで死ぬ，
　　ベール樹の傍のバナナ〔のように〕。

(104)

それ（ベール樹）が揺れればそれ（バナナの樹）が傷つく，
　　シャークタ派との交わりを止めよ。

kabīra koṭhī kāṭha kī, daha disi lāgī āgi /
paṇḍita paṇḍita jali mue, mūrakha ūbare bhāgi //
([PT] *sākhī* 21.11 ; [BI] *sākhī* 76)

カビール〔は言う〕，木材でできた屋敷，十方に火が点いた。
パンディット（学僧），パンディットは焼けて死んだ，
　　愚か者が逃げて助かった。

jehiṁ māragi paṇḍita gae, teī gaī bahīra /
aughaṭa ghāṭī rāṁma kī, tihiṁ caṛhi rahā kabīra //
([PT] *sākhī* 20.4 ; [PV] *sākhī* 31.5 ; [BI] *sākhī* 31)

パンディット（学僧）が行った道を，群集は行った。
ラームに至る険しい渓谷を，カビールは登って〔そこに〕居る。

注記

(1) Dvivedī, Hazārīprasād, 1980 (1st ed. 1940) *Kabīr*, Dillī: Rājkamal Prakāśan. pp. 17–36. Vaudeville, Charotte, 1974 *Kabīr*, Oxford: Clarendon Press. pp. 82–89.

(2) 1600年頃，ラーマーナンド派に属していた伝記作者ナーバーダース (Nābhādās) が著した「信徒列伝」。

(3) Caitanya 派に属するプリヤーダースが1712年に著した注釈書 *Bhaktirasabodhinī*.

(4) Gaṅgāśaraṇ Śāstrī, 1976 *Kabīr Jīvancaritra*, Vārāṇasī: Kabīrvāṇī Prakāśan Kendra, pp. 255–58.

(5) Muhammad Hedayettullah, 1977 *Kabir: The Apostle of Hindu-Muslim Unity*, Delhi: Motilal Banarsidass.

(6) Linda Hess, 1986 *The Bījak of Kabīr*, Delhi: Motilal Banarsidass, pp. 135–61. および橋本泰元，1990「15世紀北インドの宗教詩における逆説表現」『宗教と文化——斎藤昭俊還暦記念論文集』こびあん書房。

(7) Gaṅgāśaraṇ Śāstrī, 1989 *Bījak: Ṭīkā Manoramā* [BTM], Vārāṇasī: Kabīrvāṇī Prakāśan Kendra. の注釈の拠れば，楽器は肉体の，弦は四肢あるいはタントラのハタヨーガが説く神経脈管の，奏者は個我の隠喩。

(8) Nābhādās の *Bhaktamālā* に対する Priyādās の注釈 pp. 480-81. および 1600 年頃の伝記作者 Anantdās が著した *paricayī* にこの伝記が記されている。

(9) Challotte Vaudeville, 1974 pp. 81-99.

(10) ゴーラクナートの年代や 16～17 世紀，北インドのイスラーム教徒で民間説話を題材に神秘主義的叙事詩を著したマリク・ムハンマド・ジャーエスィー (Malik Muhammad Jāysī) に関して John I. Millis, "Malik Muhammad Jāyasī: Allegory and Religious Symbolism in His *Padmāvat*," *diss., Univeraity of Chicago, 1984.* を参照。

(11) この著者は，カビールよりも年下で同時代の同系統のサントであるセーン (Sen) とされ，この対話を実際目撃した可能性もあるが，その真正さを示す内的証拠は何もない。Rajasthan Oriental Research Institute, Jaipur 所蔵の最古の (AD. 1686) 写本が刊行されている。B.P. Śrmā, 1978 *Sant Guru Ravidās-vāṇī*, Delhi: Sūrya Prakāśan.

(12) Śukdev Siṃh, 1981 *Kabīr ke Smaraṇ Tīrth*, Vārāṇasī: Kabīrvāṇī Prakāśan Kendra. pp. 26-27.

(13) saṃskṛta hai kūpa jala, bhāṣā bahatā nīra / Vaudeville, 1974 p. 50

(14) カビール派に関する最近の研究は，David N. Lorenzen, 1981 "The Kabīr Panth: Heretics to Hinduism," in Lorenzen ed. *Religious Change and Cultural Domination*, Mexico City: El Colegio de México, pp. 151-71.

(15) Anon.: *Kabīr Sāhab kā Anurāg Sāgar*, Ilāhābād: Belvedere Printing Works, 1975.